

ハワイ移民史

第1章 その源流を探る



ハワイの盆踊り

人種や宗教の垣根を超えて多くの人々が参加。ボンダンスの愛称として親しまれ、今やハワイの夏の風物詩として欠かせぬ存在となった。(ハワイ・ホノルル東本願寺別院 2006年7月)

目 次

迎えるハワイ

- ハワイ “発見”
- ハワイ王国誕生
- 王国とキリスト教
- 農業立国への道
- 悩みは労働不足

送り出す日本

- ハワイ移民史、序曲
- 特命使節・上野景範、ハワイへ
- 日本・ハワイ、条約締結
- ハワイ国王、来日
- ハワイ移民募集と広島県令の決断
- 決断の背景・国内経済の悪化、広島県を直撃
- 広島県の風土
- ハワイ移民を希望した人々

特別付録

- ハワイプランテーション全図
- 特集 “元年者”

はじめに

3年間の出稼ぎのつもりがやがて定住・永住を決意させ、ついには帰化したハワイ移民。ハワイで生まれたことにより、アメリカ人になった“NIKKEI”たち。

しかし、これらの人々が歩んできた道は決して平らなものではありませんでした。

他国の移民よりも冷遇された初期の移民、待遇改善を求めて繰り広げた全島ストライキ、急増する日本人移民を標的としたさまざまな排斥運動・排日移民法の成立など苦難にぶつかったのです。その極めつきは、思いもかけない祖国日本の真珠湾攻撃・日米開戦でした。

ハワイへ移民した人々はこうした困難や苦難から逃げることなく、アメリカ国家の中で日本人社会はどうあるべきか、日系人としてどのように生きるべきか、という現実と向き合い、融合と解決に努力してきました。

今や日系人は「少数移民のなかでは最も成功した移民」といわれ、アメリカ社会の多くの分野でゆるぎない位置を占めています。

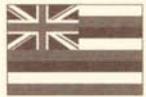
今、わが国では諸外国からの就労者や居住者が急速に増えて、これらの人々との共生や国際化への対応が課題となっています。

日本の将来を考え、よりよい社会を築いていくための有益な教訓や示唆が、ハワイ移民史から学び取れるものと確信しています。

第1章では、ハワイ王国の誕生からハワイが移民を必要とした事情、わが国が移民の要請に応じた背景、広島県人が最多を占めたその理由について紹介します。

参考文献

広島県移住史 歴史編・資料編	広島県	協力
国史大辞典 第7巻	吉川弘文館	広島市立中央図書館
第1回日本帝国統計年鑑	内閣統計局	広島県立図書館
現住人口静態に関する統計材料	内閣統計局	広島県立文書館
国勢調査集成人口統計総覧	東洋経済新報社	厳島神社
近代真宗の展開と安芸門徒	熊田重邦	
「むら」の社会と経済	ひろしま・みんぞくの会	資料
広島における綿づくりとその技術	広島市教育委員会	A イギリス国立海事博物館
北海道移住調査研究レポート	広島都市生活研究会	B ハワイ州立文書館
(広島市博物館資料調査報告書II)		C 外務省外交史料館
元年者ハワイ渡航史	山下草園	D 廿日市市教育委員会
ハワイの日本人日系人の歴史 上巻	ハワイ報知社	E 元年者ハワイ渡航史
図説ハワイ日本人史1885-1924	B.P.ビショップ博物館	F ハワイ日本人移民史
ハワイ日本人移民史	布哇日系人連合協会	G ハワイ日本人史 森田 栄
ハワイ日本人史	森田 栄	H 当館
オセアニア	国立民族学博物館	
ハワイの歴史	石出みどり・石出法太	
ハワイの歴史と文化	矢口祐人	



迎えるハワイ

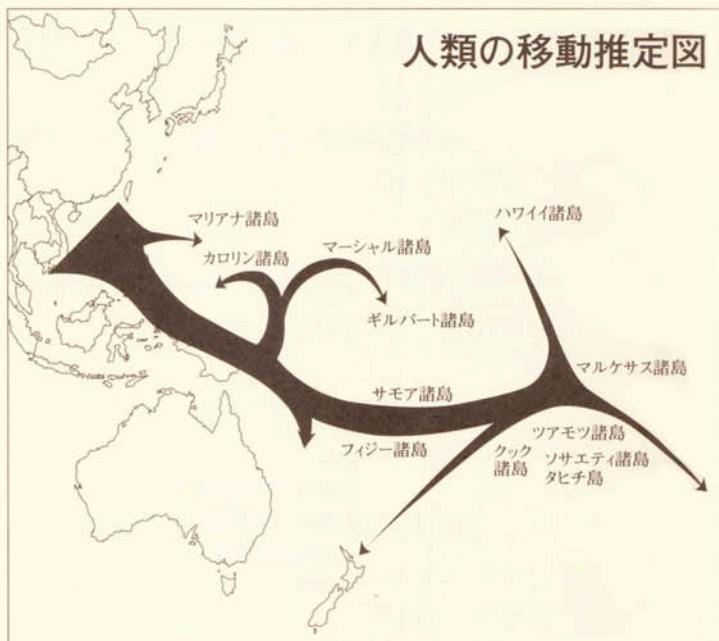
ハワイ“発見”

イギリスの有名な航海者であるキャプテン・ジェームズ・クックは、世界で初めての太平洋探検調査を行ないました。

第一次(1768~71年)・第二次(1772~77年)に続く第三次(1778~79年)の調査では、太平洋の北部から大西洋に出てヨーロッパに至る航路を探すことが目的でしたが、ソサエティ諸島を経て赤道を北上中に、オアフ・ニイハウ・カウアイ島の存在を確認し、上陸して先住民の歓迎をうけました。1778年1月18日のことでした。

クックは、カウアイ島のワイメア湾に停泊して水や野菜を補給した後アラスカへ向けて出航しましたが、寒さのため目的を達することができず、一年後の1779年1月、再びハワイに戻ってきました。今度はハワイ島コナに上陸して先住民との交流を深めようとしていたところ、ささいなことから争いとなり殺されてしまいました。

1784年、クックの調査報告書はイギリスで出版され、ハワイの存在が世界中に知れ渡ることになりました。



◎ハワイ民族の祖先

ハワイ民族の祖先は、3世紀ころ太平洋のマルケサス諸島から渡来したポリネシア族と、10世紀ころタヒチ方面から大挙して渡来した二つのポリネシア族が一体となって形成されたといわれている。

ポリネシア系民族の根源をたどっていくと、日本人と同じモンゴロイド系の人種で、これらの人々がマレー半島やジャワ島などを経て島伝いに太平洋の島々に渡ったものと考えられている。

古い時代のハワイ民族は、1778年、キャプテン・クックに発見されるまで外界との交流もなく、ハワイ民族として独自の文化を築いていた。

ハワイの古代史は、民謡や物語の形をとって語り継がれ、文字として伝えられるようになったのは、1820年に渡來したアメリカ人宣教師たちにアルファベットを習ってからだった。



◎ジェームズ・クック(1728~1779)

イギリスの世界一周航海者、海洋学者、太平洋・南極海の探検家。ロンドン王立協会の支援指示のもと3度にわたって大航海をなしとげ、南半球の大陸や太平洋上の島々の地理を明らかにし、正確な海図を作成した。壊血病を克服したことでも有名。

A

ハワイ王国誕生！

太平洋のほぼ中央に位置するハワイ諸島には、その地の利の良さから欧米の商船や艦船がさかんに寄港するようになりました。

なかでもイギリスの商船は、中国で香料や高級家具の材料として高値で取り引きされている白檀の木が自生していることに目を付け、先住民と交渉して買い付けをすすめました。

当時のハワイはまだ一国を成しておらず、4つの部族が4つの地域をそれぞれ支配して互いに勢力争いを繰り返す、いわゆる群雄割拠の状態でした。

その部族長のひとりカメハメハ一世は、白檀を売買して得た現金で武器を買い入れ、さらにイギリス船長から戦略的助言や協力を得て、1795年、ハワイ統一に成功しました。ハワイ王国が誕生したのです。

王国の歳入のほとんどは白檀貿易によるものでした。しかし、限りある資源の白檀の木の枯渇は王国の経済に暗い影を落としました。

1819年、アメリカが捕鯨活動の中継基地として、マウイ島・ラナイ島やオアフ島ホノルルの港に姿を見せはじめ、その数は次第に増えていきました。

船舶の修理・食糧の補給はもちろん、乗組員の雇い入れなどその経済的な波及効果は、白檀貿易の歳入を一気に上回りました。鯨油は、アメリカ本土で石油が発見されるまで、燃料や灯油、機械工具の潤滑油として、家庭用や産業用として大きな需要があったのです。



カメハメハ一世
(1795~1819)

◎白檀

木目が緻密で木質は固く茶褐色で芳香が持続するという特徴を活かして、仏像・櫛・数珠・小物装飾家具や薰香・抹香・線香の材料として珍重されていた。

ハワイに多く自生し、中国での旺盛な需要に着目したイギリス商船が、先住民から買い取りを続けハワイに多大な富を持たらした。しかし、伐採するばかりで植林を怠ったため、幼木を残して枯竭した。

◎捕鯨産業

1820年代からアメリカの捕鯨船がハワイを中継基地として利用するようになった。その最盛期は1840~50年代。1845~55年の11年間にはほぼ毎年500隻以上、特に1846年には600隻が寄港するという混雑ぶりであった。捕鯨船の多くは、アメリカ東海岸ニューヨークやニューベッドフォードを母港として北太平洋に出漁していたが、母港には4年間帰らずハワイを中継地として操業を繰り返していた。

ハワイでは、こうした捕鯨船に数千人が雇用され、食料・燃料・飲料水などの補給、船体の修理、乗組員に休養の場を提供することで大きな外貨収入を得た。さらに、1850年以降は収入の拡大をめざしてハワイ人自身が直接捕鯨に乗り出した。

しかし、前途洋々にみえた捕鯨産業も

- ①1859年アメリカ東部ペンシルバニアで、有望な油田が発見され鯨油の需要が減少したこと
 - ②1861年の南北戦争で、南軍に約半数の捕鯨船が破壊されたこと
 - ③乱獲により北極海まで出漁しなければならなくなり、採算が厳しく産業としての“うまみ”が無くなったり
 - ④その上、1871、76年合計38隻の捕鯨船が北極海で氷に閉じ込められ使用不能になったこと
- などが重なり急速に衰退していった。



迎えるハワイ

王国とキリスト教

1820年4月、キリスト教の布教を目的としてアメリカの宣教師の一一行が上陸を求めてきました。

王国には古代から伝わる宗教があり、国民に広く信じられ国家の統治の根幹、憲法でもあったのですが、なぜか、カメハメハ二世は布教活動を許してしまいました。『上陸を許可する』これがハワイ王国滅亡への第一歩になろうとは夢にも思いませんでした。

宣教師一行の顔ぶれは、学校教師・医師・出版業者・農業指導者、それにハワイからアメリカへ留学していた帰国学生という異色なものでした。

ハワイ島・オアフ島・カウアイ島に分かれて布教を始めた一行は、帰国学生を案内役にして、子供たちを集めて学校を作り、ハワイ語を英語で表すことを教えたり、教会ではハワイ語で印刷した聖書を配ったりしました。また医師は病人の治療にあたり、農業指導者は営農指導をして生産量の拡大に貢献して、着実に信者の数を増やしていました。

こうした活動の成果に刺激されて、イギリスとアメリカから異なる宗派の宣教師一行が次々と入国しました。

多くの一般国民ばかりか、王朝の高官の中からも入信者が続出、ついにはカメハメハ二世までもが信者となりました。

キリスト教の浸透は、古い宗教を憲法としてきたハワイ王政の根幹を大きくゆさぶり、国民の生活習慣や価値観をも変えさせることになりました。

◎ハワイ王朝・歴代の君主

1795	カメハメハ一世 (1795~1819)	カメハメハ大王 ハワイ王国を設立
- 1819	カメハメハ二世 (1819~1824)	カメハメハ大王の長男(リホリホ) 即位直後に古代宗教の禁制を廃止 ポストンからキリスト教宣教師が伝来しキリスト教が広まる 王妃と共にイギリスを外遊中、ロンドンで客死
- 1824	カメハメハ三世 (1825~1854)	カメハメハ二世の弟(カウイケアオウリ) ハワイの国家体制を確立 外国人を政府に登用 最初の刑法、憲法を制定 ハワイを独立国家として、アメリカ、イギリス、フランスが承認 土地制度の改革により、外国人の土地所有を認める 砂糖きびのプランテーションを開発
- 1854	カメハメハ四世 (1854~1863)	カメハメハ大王の孫(アレクサンダー・リホリホ) 砂糖産業による白人資本家の台頭 砂糖きびプランテーションの労働力不足
- 1863	カメハメハ五世 (1863~1872)	カメハメハ四世の兄で独身(ロット・カメハメハ) 外国人資本家に対抗するハワイ人保護主義にたち、新憲法を制定 国民に選挙権が与えられ、貴族と選出議員による議会が発足
- 1872	ルナリロ王 (1873~1874)	カメハメハ大王の異母弟の孫(ウィリアム・カナナ) カメハメハ五世に後継者がなく議会により選出 即位後1年あまりで病死
- 1873	カラカウア (1874~1891)	ルナリロの祖母方の又いとこ(デーヴィット・カラカウア) 議会により選出 砂糖産業の最盛期 日本人移民導入に努力 日本を訪れ明治天皇と親交を持つ ハワイ文化復興に努力
- 1891 - 1893	リリウオカラニ女王 (1891~1893)	カラカウア王の妹 ハワイ王朝最後の君主 音楽の才能に恵まれ、「アロハ・オエ」を作詞・作曲

農業立国への道

1835年、カウアイ島コロアで白人が始めた砂糖きびの実験栽培が大きな成功を生み、ハワイが砂糖きびの栽培に適していることが証明されました。宣教師と共に入国した白人の実業家たちは、将来ハワイは農業を中心として立国できると王を説得し、ハワイ各島で借地によるプランテーション開発を進めていきました。

さらに白人たちは、ハワイ王国が国家として欧米諸国に認めてもらうためには、憲法を定めて立憲君主制にすることを国王に進言。1840年には行政政府が置かれ、議会が開設され、裁判制度も設けられ国家としての体裁は整いましたが、これらの運用には欧米から来た白人たちの指導と助言が必要でした。王朝政府の政治・経済・文化・教育・産業といったあらゆる部門に、白人たちの影響が強まることになりました。

白人たちのプランテーション開発は一段と有利になりましたが、ハワイ全土は王の単独所有。いちいち王と借地交渉してはらちがあかないと、開発行為が円滑に進むよう土地の所有を王と245人の族長の所有に分割する法律を、ハワイ王朝に作らせました。

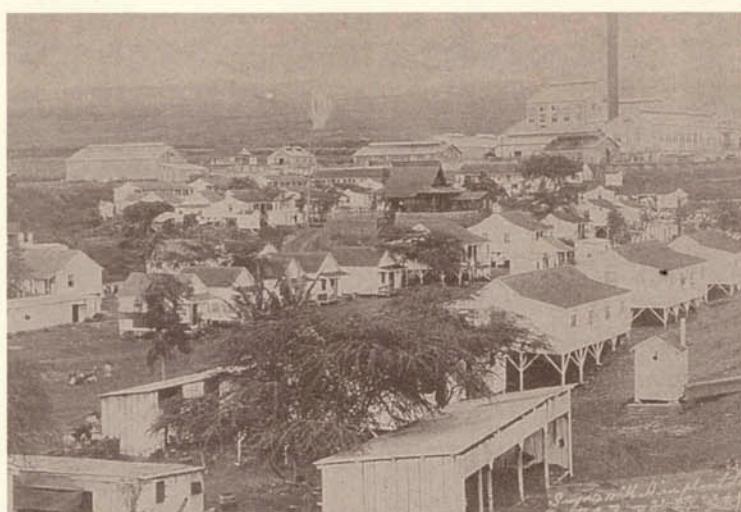
さらにこれでも不十分と、1850年には外国人でも土地が買える法律を制定させました。この法律により白人たちは、個人所有によるプランテーションの開発と経営に専念できるようになり、プランテーションは全島へ広がっていくことになりました。

この頃王国の経済を左右する二つの大きな出来事が起こりました。

一つは、1859年、アメリカ東部ペンシルバニアで有望な油田が発見され、鯨油の需要が減退して捕鯨産業が先細りとなることが確実になったことです。

もう一つは、1861年に始まったアメリカ南北戦争でした。戦争は南部に農産物の生産と流通を妨げ、綿・砂糖・コーヒーなどの価格高騰を生み、アメリカ社会に暗い影を落としました。しかし、ハワイにとっては砂糖輸出の増大という絶好の機会になりました。

ハワイ経済の主役が捕鯨産業から砂糖産業へ、軸足を移すことになりました。

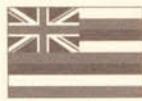


◎プランテーション

一種類の植物だけを大規模に栽培する農場をいう。農場の中に精糖工場があり、砂糖きびを運ぶ機関車が敷かれ、出身国別にまとめられた労働者の社宅やその子供たちに母国語教育のための学校まである農場もあり、ひとつの町を形成していた。

写真は1900年代初頭のアイエア・プランテーションの日本人街。街の中央に仏教寺院が創建され日本の国旗が掲揚されている。

後方の工場は精糖工場。見渡す限り砂糖きび畑が広がっている。



迎えるハワイ

悩みは労働力不足

しかし、プランテーションの現場では大きな問題を抱えていました。働き手であるハワイ人の人口が年々減少して、生産力が悪化の一途をたどっていたのです。原因は、欧米人たちが持ち込んだ病氣にありました。開国するまでほとんど外国との交流がなかったハワイ人には、病氣や感染症に対する抵抗力や免疫力がなかったのです。

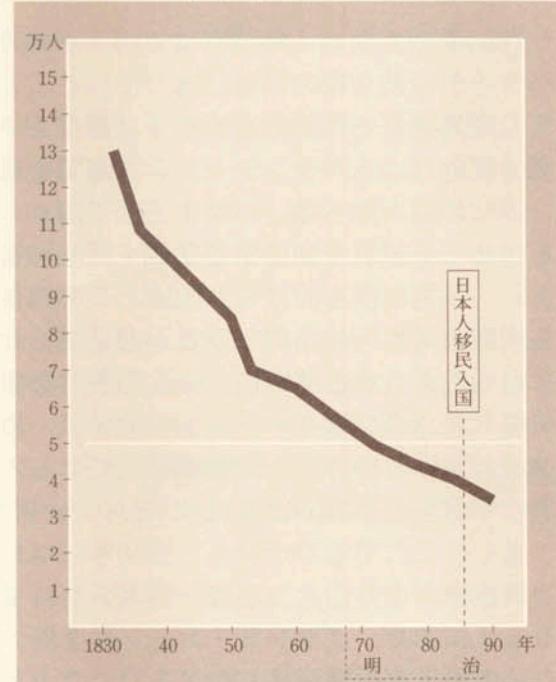
もはやプランテーションの労働力の強化には、外国からの受け入れしかありませんでした。1852年、ハワイの最初の移民として中国人が入国しました。続いてラトロンガから。しかし、定着率が悪く生産性も向上せず、他国からの移民導入が急がれました。

受け入れの条件はハワイ王国周辺、太平洋をのぞむ国、しかも大量に労働者の供給が得られるところでした。そこで日本に目が向けられました。

『日米修好通商条約』調印のため徳川幕府使節団一行がホノルルに立ち寄る、とのニュースに王朝は喜びました。

1860年、カメハメハ四世自らが一行と接見して『移民要請の親書』を託し、日本人移民を歓迎することを表明したのでした。

◎急降下したハワイの人口



◎ハワイの経済を動かした5大財閥

会社名	創業年	創業者名
シー・ブルーワー	1826年	ボストン出身の船長チャールズ・ブルーワー
T・H・デーヴィス	1845年	イギリス人T・H・デーヴィス
アメリカン・ファクターズ	1849年	ドイツ人H・ハックフェルドと義弟
キャップル・アンド・クック	1851年	宣教師S・N・キャップルとA・S・クック
アレキサンダー・アンド・ボールドウイン	1870年	1831年入国した宣教師アレキサンダーとボールドウインの孫

最も古いシー・ブルーワーは、白檀貿易から捕鯨産業へ、1863年には砂糖きび栽培に進出、不動産業や流通業にも手を抜け常に時代の波に乗って財を成した。

後発のアレキサンダー・アンド・ボールドウインはおぞまきながらプランテーション経営に参入、資本力にものをいわせて次々と買収を重ねハワイ最大の砂糖きび生産者となった。

これらビッグ5は、砂糖業38会社中の34社を占め、本業のほか衣料・食料・雑貨などあらゆる生活必需品の輸入販売も手がけ、ハワイの産業と経済を思うがままに動かした。

ここに先住民のハワイ人の出番は全くなかった。

宣教師とその子孫や友人が創業者であることは注目に値する。



ハワイ移民史、序曲

わが国に、ハワイ王国から最初に移民の働きかけがあったのは、1860(万延元)年、日米通商条約批准のため往路ホノルルに上陸した徳川幕府外国奉行の新見豊前守正興一行が、国王カメハメハ四世と接見した時でした。深刻になった砂糖きびプランテーションの労働力を補うため、日本からの移民を願う親書が王から託されたのです。

しかし、当時の日本は幕末で、国内外の問題に直面しており、とても移民について検討する余裕などありませんでした。

その後、日本にハワイ総領事館を設けたハワイ王国は、人脈を駆使して徳川幕府にハワイ移民の働きかけを続けました。

駐神奈川ハワイ国総領事ユージーン・ヴァン・リードは、江戸時代も終わりを告げようとした1868(慶応4)年、徳川幕府から出国のため渡航印章(パスポート)350人の下付を受けることに成功しました。リードは直ちに移民の募集に取りかかり、150人を乗船させて出航待機中のところで待ったがかかりました。明治維新になったのです。明治政府は徳川幕府が発行した渡航印章を、新政府発行の旅券と交換するとの理由で返納させ、出航を足止めしました。その後新政府は一転して旅券は発給しないと通告、事実上の出国拒否をしました。

驚いたリードは、『旧政府の約束事は新政府が引き継ぐのが国際慣習である』として強く抗議して旅券の発行をせまりましたが、新政府は引き延ばし戦術でこれに応じず、双方はこう着状態になりました。

リードはこのとき、奇策を思いつきました。樹立したばかりの新政府の意向は、横浜運上所(出入国管理所・税関兼務)にはまだ伝わっていないだろう、しかも出航する船はイギリス船籍、出航許可が出る確率は高いとにらんだのでした。

結果はリードの思惑通り。1868(明治元)年5月、ハワイへ向けて最初の移民が出発しました。

明治元年に出国したことから、後に『元年者』と呼ばれるこれらハワイ移民は、出航許可だけをよりどころに強行した変則的なものでした。



明治改元

1868(慶応4)年9月8日、午前8時、同年元旦にさかのぼって明治とすることになった。同年5月7日横浜を出帆した移民が「元年者」とよばれるのはそのためである。

1867(慶応3)年3月2日付第90号旅券(パス・ポート)

1866(慶応2)年4月、日本に初めての旅券が誕生した。元年者に発行された旅券も同様のものであったと思われるが、一時に350人分、しかも前例のない3ヵ年の労働目的の旅券が発行されたことは、リードの人脈を駆使した入念な根回しや、相当な力の働きかけが徳川幕府にあったことが伺える。



送り出す日本

うえ の かげのり 特命使節上野景範、ハワイへ

プランテーションでの労働は、午前6時から10時間、休憩は昼間の30分のみ、しかも炎天下という職場環境でした。“言葉も通じない、食事も合わない、横浜で聞かされた「うまい話」とは違う”と騒ぎになり、元年者を代表して牧野富三郎が明治政府宛に援助の要請をしました。

事態を重く見た明治政府は、1869(明治2)年、上野景範をハワイに使節として派遣しました。全員の帰国が前提でした。しかし、上野が“聞き取り調査”をしたところ、即時帰国を希望するものはわずかに42人、残りは3年間の期間満了まで働きたいという予想外のものでした。

東京からホノルルまでは船で往復70日間。通信手段は文書のみ。現地での判断を迫られた上野は、ハワイ政府とかけ合い待遇や契約違反を改めることのほか、契約期間が満了して帰国を希望する者への費用負担はハワイ側が持つとの約束を取りつけました。

さらに、リードの罷免をハワイ政府に認めさせ、明治政府の面目を保ちました。

◎上野景範の活躍

1869(明治2)年11月22日、サンフランシスコに到着した上野は2人の人物に面会を求めた。

駐サンフランシスコ・日本領事ブルックスには駐ハワイ・米公使ピアースへの紹介状、駐サンフランシスコ・ハワイ領事シヴィランスからはハワイの国内情勢の入手が目的であった。

12月28日、ホノルルに到着した上野はピアースを訪問、日本から持参した駐日米公使とブルックス日本領事の紹介状を手渡して協力を求めた。ピアースは上野をハワイ国外務省に案内しハリス外相に引き合わせた。

上野「ハワイ領事と自称する米国人ヴァン・リードが、わが国政府の許可なく150人も出国させ貴国へ送り込んだ。私の使命はこれら全員を帰国させることと、責任の所在を明らかにすることである。」

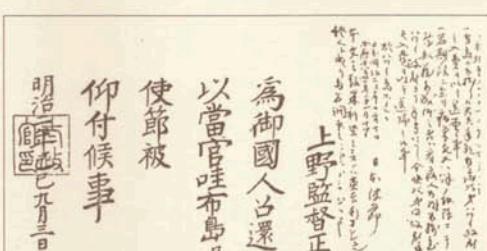
ハリス「ハワイ総領事ヴァン・リードにより150人の日本人が入国したが、誰一人英語が判らず取りあえず各地のプランテーションに配属した。横浜からの情報により事情も読めてきたので誠意を持って解決したい。ヴァン・リードに不正があれば厳正に処理する。」

この後ヴァン・リードの責任を巡って激しい応酬があったものの交渉は友好的に推移。事態の解決を見た。その陰の功労者は両国の接着剤の役割りを担った駐ハワイ・米公使ピアースであった。



上野景範(前列中央右)

左は副使三輪甫一。ほかの4人はアメリカ留学中の日本人学生。上野景範は若干25歳。大小の刀を腰に差し羽織袴で正装して、サンフランシスコ経由でハワイに乗り込んだ。寄港先のサンフランシスコにて撮影。



明治政府が発行した上野景範への辞令書

監督正の称号はハワイ特使のために明治政府が特別に作った官名。六等官に相当。

日本とハワイ、条約を締結

1871(明治4)年8月、日本ハワイ修好通商条約が交わされました。ハワイ政府は駐日ハワイ公使などを通じ移民の要請活動を本格化しましたが、明治政府はこうした熱心な呼びかけにもかかわらず全く反応しませんでした。

その理由には次のようなことが考えられています。

国内の問題

- 元年者の問題が紛糾したこと、契約移民としての海外移民に懐疑的になった。
- 佐賀の乱・秋月の乱・陣風連の乱・萩の乱・西南戦争など士族の反乱や、東日本を中心とした激化事件が多発した。
- 富国強兵・殖産興業の政策と相入れなかった。
- 海外移民に対して、反対の立場を取る寺島宗則が外務卿になつた。

外国との問題

- 中国（台湾出兵）、朝鮮（江華島事件）との関係が悪化してきた。
- ロシアと千島・樺太、アメリカと小笠原、琉球政府と沖縄の領土問題をかかえていた。
- 不平等条約の改正が最重要課題であった。

◎おもな士族の反乱と激化事件

年 次	反乱名・事件名
1874(明治7)年	佐賀の乱(佐賀)
1876(明治9)年	萩の乱(山口)・秋月の乱(福岡)・神風連の乱(熊本)
1877(明治10)年	西南戦争(鹿児島)
【士族の反乱は西日本に集中】	
1882(明治15)年	福島事件・板垣退助遭難
1883(明治16)年	高田事件(新潟)
1884(明治17)年	加波山事件・群馬事件・秩父事件(栃木)・飯田事件(長野)・名古屋事件
1885(明治18)年	大阪事件
1886(明治19)年	静岡事件
【激化事件は大阪・福島間の東日本に集中】	

士族の反乱は1874(明治7)～1877(明治10)年に集中し、なかでも西郷隆盛を中心とした西南戦争は明治政府と全面対決となり、多大な戦費負担はその後の財政を大きく揺さぶり、国内経済を悪化させる要因のひとつとなつた。



にっぽん 日布通商条約書

第4条 大日本國天皇陛下は諸外国の政府又は市民又は臣民に対して許容した又は今後許容しようとする恩典不可侵權及び利益等を同様の条件でハワイ政府及びその臣民に対して推承することを茲に約す。

既に締結していた先進国との不平等条約「治外法権」の撤廃が重要課題となっていたのに、なぜかハワイ王国との条約にもこれを認めた。

条約書の草案は上野が持ち帰った。全部で7ヵ条からなる。

※日布 日本国・布哇(ハワイ)国



ハワイ国王、来日

1881(明治14)年、ハワイ王国第7代カラカウア王が突然来日しました。

『おしのびで世界一周の旅、最初の訪問国は日本』との情報を事前にキャッチした政府は、非公式であろうとも「条約を結び国交のある君主」「明治政府が迎える最初の君主」であることを重要視して、国賓待遇とすることを決定しました。

横浜港の入港に合わせて、湾内の外国船からも汽笛がいっせいに鳴らされ、続く21発の礼砲は王を驚かせ、午さん会・大晩餐会・大夜会・観劇会・名所案内などの行事が12日間も催され王を感激させました。

政府がこうした大歓迎をした背景には

- 列強と結んでいた通商条約の中の、関税・治外法権などの不平等な部分をまずハワイ王国から改正。これを突破口に列強との交渉に臨みたい。
- ハワイが太平洋の十字路とも言うべき重要な位置にあり、商船や艦船の寄港に有利。という国益を考えてからのことでした。

条約改正の申し入れに対し、王の回答は『これに同意する』とのことでした。井上馨外務卿をはじめとする政府関係者は飛び上がらんばかりに喜びました。

王からも提案がありました。

- 砂糖の増産をはかるため、日本人労働者を受け入れたい。
- 欧米に対抗するために、日本とハワイがアジア太平洋地域の諸国に呼びかけて『東洋諸邦同盟』を結成したい。
- 日本・ハワイ間に海底電線を敷設する。
- 王のめいカイウラニ王女と、山階宮定磨親王の婚姻を希望する。

政府は慎重に検討した結果、移民の希望にのみ応じて1884(明治17)年、ハワイ政府から提出された『日本人移民ハワイ渡航約定書』を承認し、日本国内で移民を募集することの許可を出したのでした。



カラカウア王来日記念写真
(前列中央)

B

◎重い腰の日本、ハワイ特使2人が来日

カペナ特使 1882年11月、カラカウア王戴冠式への招請状を持参したカペナは井上馨外務卿ら政府の要人・皇族と面会し、もうひとつの目的、日本人移民の実現を強く働きかけた。

イアウケア特使 1884年4月、ロシア皇帝の即位式に参列するイアウケアが往路来日、井上馨に「移民の具体的な待遇を記した公式文書」を手渡し、ハワイ側の要望を伝えた。井上馨は欧米諸国との不平等条約の解決を優先するとして、移民条約の締結は留保したものの、ハワイ側の要望は大枠で承諾する旨を表明した。

これを受けて、アーウィン総領事が「渡航約定書」を提出、日本政府がこれを認めるという形の合意がはかられ、ハワイ移民は一気に前進することになった。井上馨の決断の背景には、深刻な国内経済の悪化があった。

ハワイ移民の募集と広島県令の決断

駐神奈川ハワイ国総領事兼ハワイ国移民事務局特派委員、ロバート・W・アーウィンは、三井物産会社に協力を依頼して、移民募集の活動を始めました。まず、都道府県知事の代表であった東京府知事芳川顕正に手紙を送り「全国知事会議の場などで、地方行政機関に協力するよう呼びかけて欲しい」と協力を依頼しました。

アーウィンからの要請に対する各県の反応はさまざまでしたが、わが広島県では広島県令(県知事)千田貞暁が旧安芸国に的を絞り積極的に取り組みました。

広島県がハワイ移民全国第一位となった最大の要因は、県市町村の行政組織が一体となって移民の募集に協力したことになります。

決断の背景・国内経済の悪化、広島県を直撃

1873(明治6)年、明治政府は財政基盤を固めるために、地租改正を決めました。土地の地目(田・畠・山林)と面積から土地価格をはじき出して、一律3%の税金を所有者から徴収することにしたのです。

このため農家は作柄の豊凶に関係なく課税されることになったばかりか、納税制度も物納から金納へと改められたため、生産品を換金する必要にせまられ、市場相場の変動に泣かされることになりました。小作農は経営が不安定になったばかりか、貧困の度合いを増し、自作農の中には農地を手放すものが多くなりました。

さらには、官営事業への過大な投資、西南戦争のばく大な戦費調達のための紙幣発行でインフレが起こり、これを静めるために取った増税策と紙幣整理策がデフレと不況を招き、国民の生活を圧迫しました。

広島県では、特産品の安芸木綿の加工・製造・流通に携わる関連産業も規模の縮小や廃業をせまられ、広島県の不況は他県よりも厳しさを増していました。人口の多さも解決の道をいっそう険しいものにしていました。

広島県では打開策のひとつとして、北海道移住を進めていましたが、そこに飛び込んできたのがハワイへの出稼ぎ話でした。年収は農業年俸(小作)の約10倍もの高額でしたので、ハワイ移民が県民生活の有効な救済策となり、県の歳入確保にもなると県令が考えたのも当然の成り行きでした。

◎課税のための地券発行

課税標準を地価におき、作柄の豊凶に関係なく地価の3%を税金として定めた地租改正。1873(明治6)年公布。広島県では1875(明治8)年測量開始、1883(明治16)年ころ事業完了。

地券には土地所有者(納稅義務者)・所在地・地目・面積・地価などが記載されている。

1883(明治16)年の小作率29.8%が4年後には35.8%、農地を手放す農民が増えた。

この改正が農民にとって不利益であったことを示している。





広島県の風土

江戸時代末期におけるわが国の総人口は約2700万人、1750(寛延3)年を100とした増加率は約1.03倍、江戸時代の人口は停滞していました。

ところが、周防・薩摩・安芸の各國の人口増加率は1.5倍から1.7倍と他国を大きく引き離し、安芸国は全国第4位を占めています。

安芸国の人団増加の要因には

1. 信仰熱心な淨土真宗の信徒が多く、教義のひとつである『殺生（生き物を殺すこと）の戒め』を堅く守り、産児制限や間引きをしなかったこと。
2. さつまいもなどの農産物のほか魚介類も豊富にとれ、食糧事情がよかつたことや、温暖な気候に恵まれていたこと。
3. 全国有数の綿作地帯で経済活動も活発であったこと。

綿花の栽培には、稻作の約2倍の人手を必要としたほか、加工（種子の除去・綿打ち・糸引き・糸巻き・染色）から製品（織物・布団・足袋）にした後にも、京阪方面への販売・流通と運輸という産業も発展。米作の2倍の収入の綿作が多く雇用と経済効果をもたらした。

そのほか生糸や野菜栽培など多彩な商品作物を生産して耕地利用率が高かったこと。

4. 沿岸部では塩田やのりやかきの養殖、瀬戸内海近海での漁業も盛んで漁具生産・造船業のほか、肥料としての干鰯・かき灰も盛んに生産されたこと。

山間部でも、砂鉄の採取・製鉄・製紙・麻芋などが生産され、なかでも沼田郡では麻芋の生産だけに止まらず近隣の郡からこれらの原料を買い集めて、麻布・麻縄などに加工製品化する地場産業が育ち経済の活性化に貢献した。

など、宗教との深いかかわりと経済の発展があったことがあげられます。

多くの労働力を必要とした多種多様な産業も、人口増加を吸収しきれずあふれた人達は安芸国の内外へと職を求めて移動しました。これが、出稼ぎの誕生です。

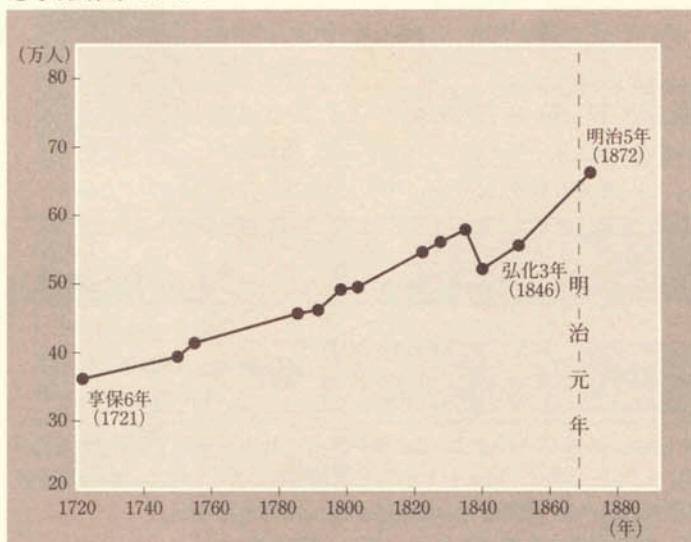
出稼ぎ先の情報はどのようにしてたらされたのでしょうか。

舟運の発達にその鍵があります。当時の輸送手段の主なものは海路でした。内陸部の生産品は川舟により広島城下まで運ばれ、港には本州を廻って商いをする北前船が寄港しました。藩内にも500石船の外航船が建造され、大阪・江戸までを往来、沿岸と島しょ部を結ぶ内航路も網の目のように張り巡らされていました。域内外の耳よりな話、生活・経済動向や求人情報は輸送や販売に携わる人達から伝えられました。海上輸送の発達による域内外の人達との交流は、見知らぬ土地への興味を抱かせ不安を和らげることにも役立ちました。

海と向き合った生活体験が、社会性や積極性を養い、人々の精神風土に大きく影響したことは間違ひありません。

突出した人口

○安芸国の人口

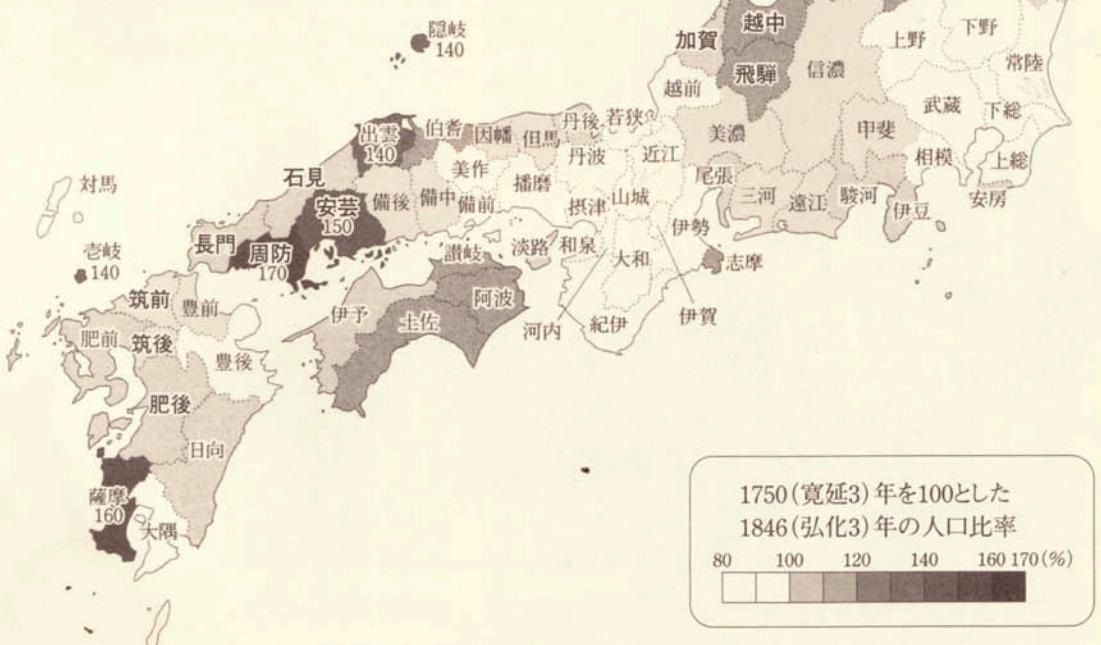


干ばつ・水害・虫害などの災害がほぼ2年に一度の割合でおこり飢餓に見舞われたが、右肩あがりの増加を見せた安芸国の人口。

実際にはもっと多かったといわれ、幕府へは過少に報告したと考えられている。

◎江戸時代の人口比率

太字は浄土真宗寺院率の高い国を示す



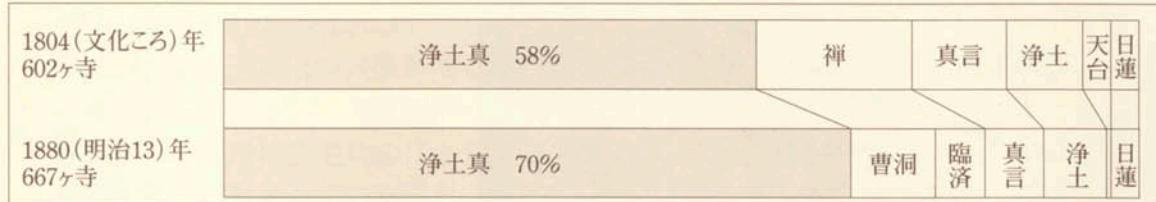
宗教とかかわり

◎宗派別による安芸国寺院

浄土真宗寺院の多い背景には

- ・毛利時代からの保護があった。
- ・世襲制のため、檀家の維持やその増加に力を注ぐことができた。
- ・法話が盛んに行われ、教義の理解が高められた。
- ・江戸時代より浄土真宗に改派・開基する寺院が多くなったこと。

などが挙げられる。



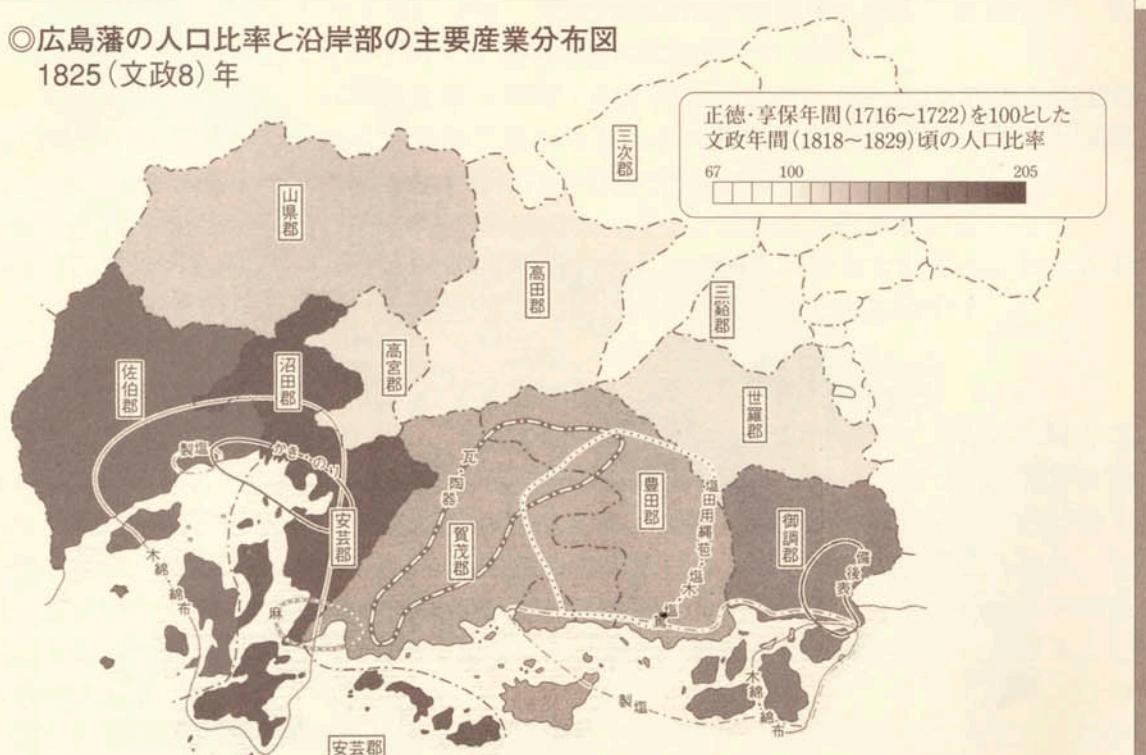
浄土真宗寺院では、教義を広め信徒の維持と拡大を目的とした講(こう)とよばれる組織を作った。数十戸単位で構成された講には講頭が選ばれ、寺院の年中行事の推進役として協力した。また、講中(こうじゆう)(会員)に冠婚葬祭があった時には講をあげて扶助し福祉的な役割も担った。講は日常生活においても地域の助け合い精神を育み連帯感を高める役割を担った。

初期のハワイ移民が、浄土真宗門徒の多い広島・山口・福岡・熊本の各県に集中していることは興味深い。

経済の発展

◎広島藩の人口比率と沿岸部の主要産業分布図

1825(文政8)年



広島藩の中でも真宗寺院率の低い三上・甲奴・奴可・恵蘇郡の人口が減少している点に注目。
北部から南部へ、出稼ぎは安芸国内でも行なわれた。

出稼ぎの誕生

◎江戸時代中後期の出稼ぎ先

出稼先	備中国・予州(別子銅山)・作州(津山・周辺の銅山)・大和吉野・宇陀・多武峯・対馬・九州方面・大阪方面
職種	家大工・船大工・木挽・榎・石工・屋根葺・唐臼直し・商人(行商)・鍛冶・杜氏・家事手伝・漁業・単純労働

いわゆる“手に職のある”者が高収入を得られたため、熟練労働者を中心とした集団をつくって出かけた。

なかでも石工の技術水準は高く、港のがんぎ・防波堤、新開地の擁壁、棚田の整備に多くの需要があった。

◎明治時代 松方デフレ不況と自然災害(1883~1885年)に伴う出稼ぎ先

- ・呉市・海軍工廠
- ・北海道室蘭・日本製鋼所
- ・鏡ヶ淵紡績
- ・九州・炭坑
- ・和歌山・北九州などへの出稼漁業

北海道へ開拓移住

北海道への移住は1869・70(明治2・3)年頃から始まり、その中心は士族や東北地方の農漁民であった。

◎移住の条件 1874(明治7)年

移住農民 一戸あたり	<ul style="list-style-type: none"> ・仮家作料金10圓 ・農具7種・種物料金 ・1円50銭を各々支給 ・入籍後一家で3ヵ年開墾した土地は私有地とする ・地租免除
---------------	--

広島県からの第1陣は1880(明治13)年の48戸が最初とされ、統計がとられた1882(明治15)年から3ヵ年は上位3位内(旧国別)に入り、これが移民県広島と呼ばれる源になった。

1885(明治18)年にハワイ移民が始まると北海道移住数は急速に減少したが、1892(明治25)年から再び戸数が増加している。必ずしも農業を専業とせず他の職業を目的としている人達も多くいた。注意すべきは、北海道移住は一家を挙げての移住であり、ハワイ移民は単身者が主体で稼いで帰ることが前提にあったことである。

◎広島県民の北海道移住者数

年次	戸数	男	女	計人	旧国別順位
1882(明治15)	70	175	155	330	3
1883(〃16)	109	275	226	501	1
1884(〃17)	161	346	291	637	2
1885(〃18)	98	255	200	455	9 府県別順位 ハワイ移民始まる
1886(〃19)	75	176	184	360	10
1887(〃20)	21	47	34	81	17
1888(〃21)	17	44	39	83	20
1889(〃22)	14	25	27	52	26
1890(〃23)	43	77	48	125	18
1891(〃24)	82	179	115	294	13
1892(〃25)	213	469	341	810	13
1893(〃26)	363	754	595	1,349	11
1894(〃27)	359	791	583	1,374	13
1895(〃28)	262	537	341	878	17
1896(〃29)	258	527	374	901	11
1897(〃30)	261	417	287	704	19

海外に活路

◎日布渡航条約の前文

日本皇帝陛下御令シテ、布吐諸島近海航行する者數多シ人本船約以て確認シテ、便利隨意航方法向而後渡航する者有者にて。又日本皇帝陛下布吐諸島近海航行人布吐諸島法律達ニ載定之有効保護與ヘ。又希望ナリ。右重要事件、事件ノ特約、締結ニテ決定ニ同、渡航係協議締結シテ、又為日本皇帝陛下外務大臣及主事官等伯井上督其公權委任又布吐皇帝陛下其代理人及美總領事ナリト。テ、又ノ特約ナリ。又ノ特約ナリ。ウサギ。ケイセイ。ケイケイ。其公權委員命

1886(明治19)年1月28日 日布(日本とハワイ)渡航条約(全7条)を締結(東京)。同年6月2日公布。

ハワイ移民は、ハワイ政府が作成した「日本人移民ハワイ渡航約定書」を日本政府が承認する、として始まった。しかし、第1回・第2回の移民と、現地雇用主との間で紛争が多発。この約定書の不備を補い移民の保護を目的として条約が締結され、初回からの移民にさかのぼって適用された。

◎ハワイ移民求人票

募集要項

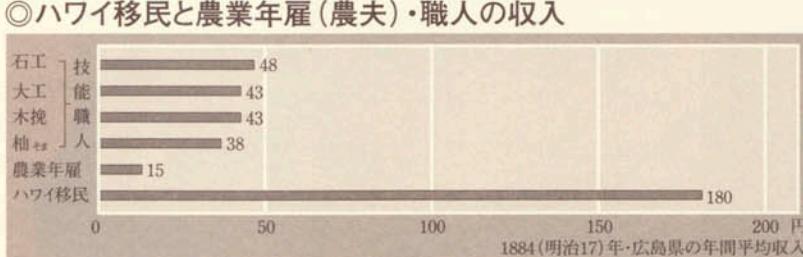
ハワイ国総領事 R·W·アーウィン

職種	砂糖きびの栽培と製糖工場勤務
応募資格	身体健康的な農業経験者 家族同伴、単身いずれも可　ただし女性単身は不可
給料	男・15ドル（基本給9ドル+食費6ドル） 女・10ドル（基本給6ドル+食費4ドル） 労働日数と時間・1か月26日間・1日10時間（工場は12時間）
福利厚生	病気治療費 炊事用の薪 住居費 白米・1ポンド当たり5セント以下で支給
特約	3年間の労働義務がある
そのほか	特典・3年間人頭税を免除 給与の25%を天引預金、利息をつけて帰国時に一括払 横浜・ホノルル間の運賃と食事はハワイ国政府が負担
契約の方法	横浜で①移民とアーウィン・ハイ国総領事が ホノルルで②移民と農場経営者が契約書を交わす 日本人移民は計2回契約書に署名する

◎移民への注意書 1885(明治18)年5月25日

「ハワイ国の法律を守り、まじめに働き営約につとめ、お金を貯めて無事帰って来るよう」広島県令が第2回の移民たちへ手渡した論告文の写し。

県民生活の向上と県財政の改善に熱い期待を寄せたことが読み取れる



◎ハワイ移民の募集・佐伯郡長 1884(明治17)年12月3日

砂糖製造と耕作労働者を800人募集。第1陣の出発は明治18年1月20日横浜港から。資格は40歳未満の農夫、妻子の同行も可。給料は男9ドル、妻6ドル、住居とある程度の食料は支給される。横浜→ハワイ間の渡航費はハワイ国負担であるが、横浜までの旅費は個人負担である。個人負担については前借りをすることができる。ただし、労働期間は3ヵ年である。佐伯郡長が郡内の各戸長あてに通達した。

動物也一二三四異
老也。昔出其侍方ノ義ニ甘苦ニ及小役者有其
處也。故其往來千人以上莫不延年。神田ノ医者有其風
夫ニレア少體機智達者クハ少ニ。操作勿勤。一拂。輕者ナ
退。而百病无犯。尤先之。其後四十一年。一日。月日リ。偶夜夢ニ
致。故其時。其子。其孫。其孫女。其孫女。皆有奇病。不可
不告。且五木身ノ増ヨリ月滿處ノ取食ハ。白鶴ナレに別
「其金用度ノ定メ。而有其體。薄ヨリ豊可也。本ノル。有
當。ノ。寧食其食。莫テ少。但與其兄并此二木人へ。一月九日那
未。」（同六部院人給料ヲ改）五ヶ年間開大ノ業。既
カレ。而義姫ニ有え。武蔵守内。而「恩ノト。精勤。實生貢
是取私奉。未ノ九月。而其事。而内。而「恩。」（即人於外事
而過。）出張。上相尊。子孫承。可取其旨。皆因他事
但。本太廟日。マニ何等事。出サル。村万八方。八方。國。但
之ト。可日。假使事。

ハワイ移民を希望した人々

収入は日本の7~8倍になるという夢のようなニュースと、市町村役場が応募の窓口という安心材料が重なって安芸国の人々を“移民”に駆りたてました。

応募資格は身体健康的な農業経験者というのが条件でしたが、応募者を地域別にみると漁業専業や半農半漁の多い沿岸部からの渡航者もいました。

移民の多数を占める農業経験者は規模の小さな農業者や小作農業者です。その理由として農民一人あたりの耕地面積が少なかったことがいわれていますが、反面、広島県には大地主の農家が少なかったことも併せて考える必要があります。

さらに、耕地面積が少なくとも綿作による収入は米の2倍、商品作物も需要の動向変化に応じて品種や作付量の調整をして単位面積当たりの稼働率を高める努力をして、収入の増加に結びつけていたことは注目すべきことです。

応募者は単身男子で戸主や長男が多くを占めました。これはハワイ移民が3年間の労働契約期間に「稼いで帰る、帰国を前提とした移民」であるということを示しています。

血縁関係者や地域の人々が誘い合ってというのも大きな特徴です。地域の顔見知りのものが大勢でハワイに、しかも、浄土真宗の宗教行事を通じて親密な関係があったということが、現地での強い結束力となりました。結果として脱落者が少なく勤勉な県民性とも相まってプランテーション経営者から歓迎され、さらなる移民の誘いかけにつながりました。このことが、特定の地域出身者が増えることになった要因のひとつです。

特筆すべきは、「日本よりも苛酷な労働であった」ことのみが強調されすぎていることに注意を払うべきです。確かに炎天下の農作業で休憩は昼休みのみという厳しいものでした。

しかし、日本での農作業は夜明け前から日没暗くなるまで長時間にわたっており、労働エネルギーに置き換えてみると必ずしもそうとは言い切れません。

1日10時間、働きさえすれば確実に給料が得られるということに魅力を感じて、3年間の労働期間を延長した人や、再渡航を繰り返した人々が多くいることも考え合わせると、逆にハワイのほうが居心地がよかったとの見方をすることもできます。

貧しかったからハワイへ、と決めつけるの目的を得ていません。

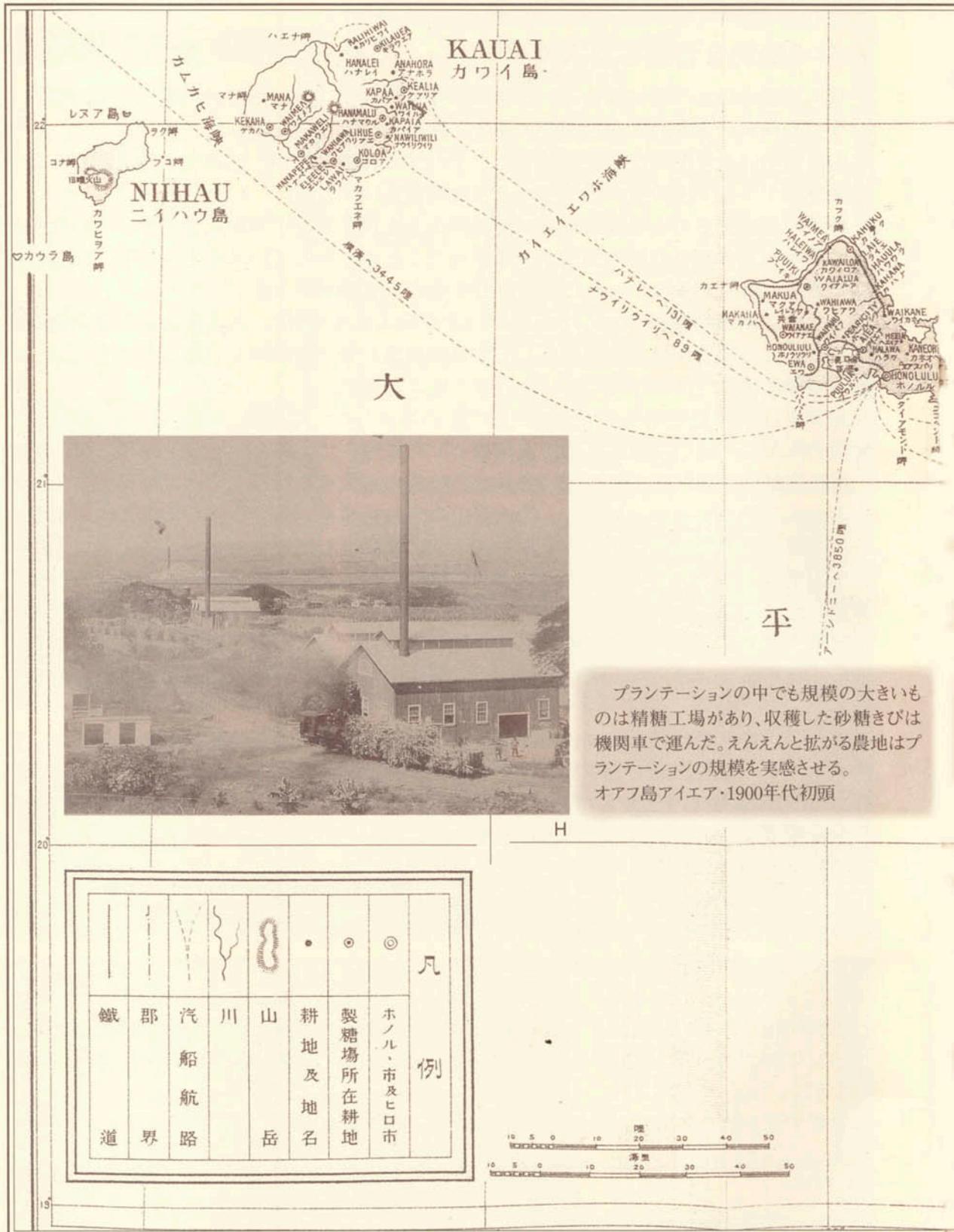
ハワイ移民の背景は、渡航年・渡航目的・職業・年齢・出身地など様々な角度で検証する必要があります。

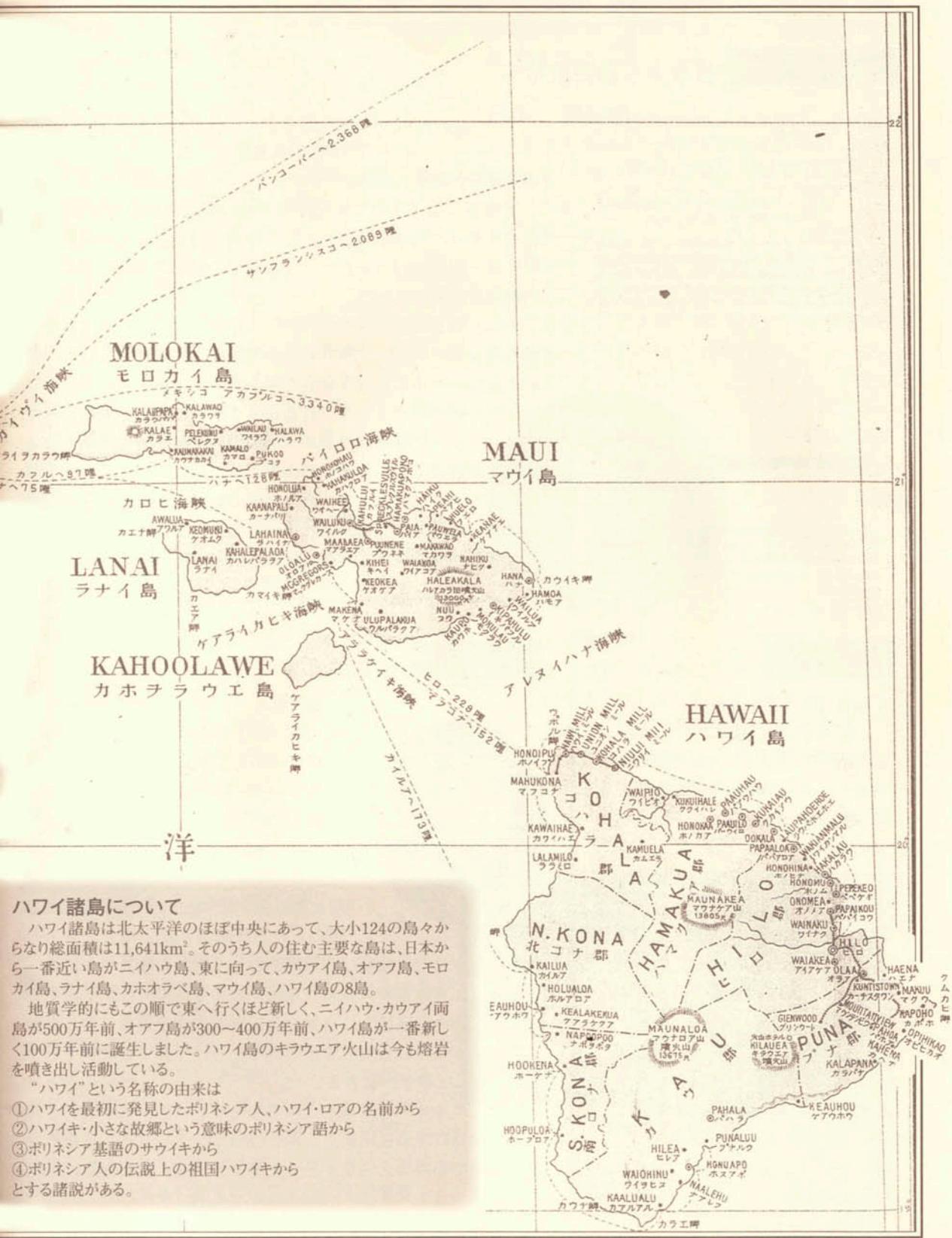
1885(明治18)年2月8日ホノルル到着に始まるハワイの日本人移民史は、移民禁止となる1924年(大正13)年5月26日まで、官約・私約・自由・呼寄と各移民時代に分けられています。

次章ではこれら各時代の背景と実相について迫ります。

※ハワイ移民という言葉は、ハワイへ出稼ぎに行った人・定住、永住した人・ハワイで生まれた人の総称として使用しています。

ハワイ諸島のプランテーション所在地図 1915(大正4)年

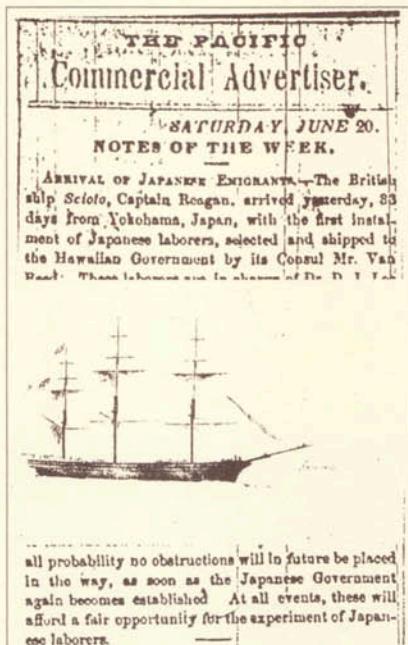




特集・元年者

新聞報道

日本から移民来布^{※1}



パシフィック・コマーシャル・アドバタイザー 今週の出来事

日本人移民が到着 英国船サイオト号(リーガン船長)が、ヴァン・リード領事によってハワイ政府のために選ばれた第1回の日本人労働者を乗せ、横浜から33日かけて昨日入港した。これらの労働者は、リー医師とバウム氏から行き届いた世話を受け、申し分のない健康状態で到着した。

しかし、航海中に1人が亡くなり1人が船中で生まれた。日本人労働者は全部で148人、その内6人は結婚し妻を同伴している。彼らの来航はハワイにとって時宜を得たものである。彼らは賃金について何ら決められていないにも拘らず快くハワイに来てくれた。

ヴァン・リード領事は、日本の旧政府と大量の移民契約を結んだが、新政府はそれに異議を唱えたため、既に確保していた少数の者だけを送った。たぶん、将来日本の新政府が確かなものになると同時に支障がなくなるだろう。ともかく、政権の確立が日本人労働者の移民について正常化をもたらすだろう。

研究

元年者、正しくは何人か

元年者の渡航者数については、148人、150人、153人など諸説があるが、本紙では布哇報知社・前編集長渡辺礼三説150人（密航者9人）をとった。148人説は航海中に1人死亡、移民総監督牧野富三郎は労働者としてみなかったので、150人から差し引いて148人としたというのが根拠のひとつとなっている。153人説は日本国外務省記録である。

渡航日数も諸説あるが、5月17日出発6月19日到着で34日となり、これに日付変更線の1日を加えて35日とするのが至当であろう。ハワイには「元年者研究会」があり、今も元年者についての研究が続けられている。

証言 佐久間米吉



※2 当時住んでいた浅草で口入屋の川上源七がハワイ行人夫を募集しているというので聞いてみると、横浜の木村半兵衛がハワイ総領事ヴァン・リードから頼まれたとのこと、これは面白い私も行ってみようと思いつつ申し込みました。江戸は官軍が今にも攻撃をかける、幕府は勝安房守が開城に向かって奔走している、町の人々は大戦争が起ると上を下への大騒動でした。浅草は陶器商が多く全国から職人らが集まっている、たちまち25人のハワイ行が決まり勇んで江戸を出発しました。途中の高輪では官軍の先遣隊が次々と到着、少し見物して川崎あたりに着くと官軍の兵隊だらけで通ることができず、裏道を通って横浜へ着きました。

23日にサイオト号に乗り込みましたが、横浜が官軍に引き渡され^{なべしまかんそう}て24日には鍋島閑叟さんが守護職につきハワイ行を止めるという噂で船内は大混乱、差し止められては大変だと急に出帆しました。

1816(大正5)年11月談

※1 来布…ハワイに来たこと ※2 口入屋…仕事先を紹介する職業 ※3 No.2 War…日系英語・WW II ※4 ヒロ…ハワイ島にある地名・ハワイ語

その後の元年者

残留組

牧野富三郎

元仙台藩の具足師、人望と教育があるので元年者移民の総元締におされた。英語ができるとされたが、何を言わてもアイテンキソーソ (I think so) と答えるのでアイテンキソーフ富三郎と呼ばれた。サンフランシスコへ渡ったとされるがその後は不明。牧野がハワイにいてはうるさいのでハワイ政府が金を渡してサンフランシスコへ行かせたとの話もある。

小沢金太郎・おとみ

プランテーション経営者宅でコックを勤める。渡航中のサイオト号で長男洋太郎が生まれ、後にハワイの日本人巡査第1号となる。ハワイで生まれた長女糸子は日系人第1号。次男のアーサー健三郎は日系人弁護士第1号となり、日本人社会の発展に尽くした。

桑田松五郎

ハワイ人と結婚、仕立の技術を生かし仕立屋を開業、技術の確かさと人柄の良さで人気を集め繁盛した。孫のひとりはハワイ郡長になった。

黒田万次郎

1871(明治4)年馬車屋を開業、元年者が独立した第1号といわれる。

吉田勝三郎

1844(明治17)年ハワイ政府が官約移民の契約条件を決定するため「官約移民招来準備会議」を開催、三浦藤吉と共に元年者を代表して出席、堂々と意見を述べ日本人に対する評価を高めた。

い 異 聞

元年者の先輩

世界文化遺産に登録された巣島神社。優美な本殿を囲むように国内外から寄進された石燈籠は大きさも形もさまざま。

寄進者は在布哇(ハワイ)国ヒロ市鈴木国蔵。高さ1丈8尺(約5.4m)の巨体が見る者を圧倒する。通称ヒロの国(藏)は1866(慶応2)年ハワイに密航、雑貨商で身を興し財を築いた立志伝中の人物である。家族を引きつれての諸国漫遊、「おらも名士の仲間入り」と、見事に彫られた骨太の文字が栄華をきわめた彼の人生を彷彿とさせる。

佐久間米吉

元陶器職人、航海日記を残した。ハワイ人と結婚するが死別、後妻は広島県人。孫のひとりは442連隊 (No.2War) ^{※3}に志願しフランス戦線で戦死した。

日本・帰国組

元年者の帰国希望者は42人であったが、元年者以前にハワイにいた1人を加えた43人が帰国した。このうち36人は帰るあてもないため「授産」と称して政府が面倒をみることになった。短期間でも外国生活を体験したので英語も出来るだろうと、外国人の多い横浜市内の巡査の補助として採用。ほかの巡査と区別するため、背中にハワイ帰りを意味する印を染め抜いた印ばんてん(はっぴ)

を着せた。しかし、期待した英語は全く出来ず勤務成績も不良で政府は手を焼いたようだ。

元年者に紛れ込んだ密航者・
石村市五郎

1895(明治28)年

2度目の帰国時の時、28年間音信不通であった姉を新聞広告を出して探し当て再会を果たした。腕に覚えの有るコックの技術を生かし、1896(明治29)年コック学校を設立、その後、奥村多喜衛牧師らの後援を得て校舎を新設、1000人に達する卒業生を送り出した。



E 石村市五郎



H

ハワイ日系3世代(2・3・4)
のファミリー、ヒロの国の石
燈籠を“表敬訪問”。
2008年3月



H



ハワイ移民史 第1章 その源流を探る

発 行 平成20(2008)年12月25日発行

著 者 仁保島村社会科研究会

発行者 ハワイ移民資料館 仁保島村

館長 川崎 壽

〒734-0026 広島市南区仁保三丁目17番6号

電話・FAX 082(286)6331

www.nihojimamura.com

印 刷 広島中央印刷株式会社